

白一色の雪景色の中にただ一点真紅に描かれた
半裸身の女！義姉の行方を追って嚴冬の竜飛崎
に向かった女に襲い掛かる画家の殺意とは？

赤い鴉の殺意

平 龍生

※赤い鴉（からすの殺意）

1

白い雪の原野を舞う赤い鴉は、鋭い嘴を持っているのだろうか―仁科奈津子はこのところ、堂前白蛾の描いた油彩画の一つ『赤い鴉』のモチーフのことが気になっていた。

堂前白蛾は、北の地、津軽半島の厳しい冬に自ら対して画策を練って来た。冬になると、日本海に面した漁村地の番小屋を改造したアトリエに住み付き、彼はここ七、八年、白い冬景色を主題した作品をものにして来たのだった。白蛾の油彩画は、赤い一点の描き方が特徴だった。

たとえば、奈津子が関心を持っている赤い鴉のタイトルが付された絵もそうである。白一色に塗り込められた海岸地帯に、何軒かの漁師小屋があり、空だけが、少し陰鬱な灰色に描き分けられている。

あくまでも、白と黒を基調にした作品であった。

それだけだと、単なる冬景色を描いただけの作品だったが、どの絵にも、一点の赤を添え、白蛾は自分だけの世界をそこに示した。

いま、奈津子が特別に関心を寄せている赤い鴉の絵も、暴雪に吹き荒れ

る雪野の防柵の上に、羽を一杯に広げた赤い鴉が一羽止まっている構図であつた。その絵を見る限り、特別に、鴉は鋭い嘴を持っている訳でもない。

もちろん、生餌を啄んだあともなく、嘴から、赤い血を流しているのでもなかつた。全体の構図では、赤い鴉は、片隅に位置し、画布の一部分しか占めていなかったもので、それは、あくまでも、点景であつた。

しかし、それだけに、ほぼ、白一色の画面では、赤い描点は見る者になり、強い印象を与えた。独創的な赤い描点は、他の絵でも試みられている。

浜辺に打ち捨てられた一艘の漁師小屋の赤いトタン屋根、或いは、春を待たずに咲いたのか、赤い椿の花が一輪、白い雪の風景の中に落ちていたりする。『赤い鴉』も評判のいい作品だったが、堂前白蛾の代表的作品といわれるのは、『赤い風雪の女』と題されたF十号の絵だつた。九年前に描かれた、この作品によって、白蛾は画壇に迎えられた。風雪に耐える白い樹林に配した一点の「赤い衣の女」が、評判を呼んだのだつた。

細面で目鼻のない女は雪女にも見えた。黒い黒髪も、裸身に着けた赤い衣も、強い風に颯（なぶ）られていた。胸元がはだけ、片方の乳房だけが露出しており、衣の裾も乱れている。女は、樹林へと去ろうとしているかに見えた。ちらと、後ろを振り返っていた。

この絵のモデルになった女は誰なのか？そのことも、これまでに、奈津子は気になっていた。『赤い鴉』と『赤い風雪の女』の二つの絵を、奈津子

は、自分だけの思考だったが、関連付けてみて来たようなところがあった。白蛾の赤い描点の絵に、これまで、奈津子が興味を寄せて来たのには、それなりの理由がある。

十七年前のことになるが、直接、白蛾と奈津子は、顔を会わせていた。まだ、奈津子が二十歳で女子大の三年生のときのことであった。

奈津子を白蛾に引き合わせたのは、仁科美聖（みきよ）であった。

このとき、美聖は二十六歳、新進画家として頭角を表しつつあった十歳上の白蛾とは、愛人関係にあった。

美聖は奈津子の父親が外で産ませた子で、奈津子が美聖の存在を知ったのは、美聖自身が奈津子呼び出し、二人の血のつながりを知らせたからであった。奈津子が十九歳で多感な年頃であったから、かなり、ショックを受けた。二人は父親似で、同じ母胎から生れ出た姉妹のように、よく似ていた。瓜実顔で、それに、色白、切れ長の二重瞼も相似点があった。

慰謝料を貰い、美聖を母親は女手一つで育てた。遠い地に住むようになり、その後、母子は仁科家とは絶縁となった。

美聖が二十歳のときに母親は病気で死に、美聖は天涯孤独の身になった。どのように、美聖が身過ぎ世過ぎをして来たのかは、奈津子は知らない。

その美聖が九年前に、奈津子の前から姿を消した。『赤い風雪の女』を、白蛾が発表する一年前のことであった。その前の時期、美聖は奈津子に通の遺書のようなものを手渡していた。「先生に迷惑が掛かるかも知れない

から、わたしに何かあった後に、封書は開けるようにして。わたしの意志がわかるかもしれない」と、謎めいた注文を付けられた。

それで、奈津子は封書については開封せずに所持していた。もう一言、美聖は「わたしの相談相手になってくれた人を紹介しておくわ」とも付け加えた。相談相手というのは、銀座の画廊主、西峰勇司郎だった。

美聖が失踪したあと、一度、奈津子は西峰の画廊を訪ねた。美聖の行方に仔細を質したが要領を得ない結果となった。

このとき、遺書らしきものがあることは告げなかった。

美聖と白蛾との仲取り持った経緯が、西峰にはあったので、奈津子は西峰を頼りにしたのであった。

結局、封書は、今日まで開封しないまま置かれていた。

その後の美聖と白蛾の関係だが、何かあったとしても、別に事件ごとになっっている訳でもなかった。騒ぎ立てることでもない。

文箱に収めたままの封書、秘密めいた話のままに、ここ、九年間、いまも奈津子の手元にあるのだが、そろそろに、奈津子はその中味が気になるし始めていたのだった――。

美聖が行方をくらましてからの、あとの歲月、奈津子は結婚をし、一子をもうけた。が、決して幸せな結婚生活ではなかった。夫で、養子の直樹は父親の経営していた小さな証券会社を継いでいたが、父親とは性格が合

わず、事業面でも支障も出た。

また、生まれた女兒は、幼稚園児になった或る日、半年前に、暴走車の被害に遭って敢え無く死んでしまった。免許取りたての未熟な運転者のゆえのことで、スピードの出し過ぎが輪禍を招いたのである。

送迎バスを迎えに行く時間、奈津子は二、三分、遅れた。そのことで、夫からは責められた。倒産寸前の会社での、父親との鬱憤を晴らす勢い問責され夫婦仲も一気に陰悪となった。奈津子も鬱の気持ち抱くようになって、負債の整理をしてから、父親も心労のゆえか、脳出血を発症して、一ヶ月前に他界してしまった。あれやこれや、ある内に、結婚生活も破綻を来たした。奈津子の母親、父の死の三年前に他界していた。

慌ただしく、凶事が続き、すっかり、奈津子は疲れ果てた。

急に、虚脱感に襲われた。

まだ、三十一歳の若さだったが、何だか人生の終わりのような気がした。

ふと、一人旅がしたくなった。九年前、美聖が奈津子の前から姿を消すとき、「二人旅に出ようと思うの」と漏らしたのを、奈津子は思い出した。

初冬の季節のことで、このとき、美聖は東北北海道の能取湖（のとりこ）に行くつもりと、奈津子に告げた。

自分自身が一人旅を考えたとき、やはり、奈津子は能取湖に出かけてみたいと思った。美聖が口にした能取湖・サロマ湖の水辺に咲く真っ赤なアツケシ草を、奈津子も目にしたいと思ったのだ。

そう考えたとき、憑かれたように、奈津子も旅に出る決心をし、そして、北海道の地に渡っていた。美聖の遺した封書も、小さき旅行バッグに忍ばせていた。

2

奈津子がサンゴ草とも呼ばれる赤い花を、もう一度、目にしたいと思ったのは、能取湖の近くの旅館が、初めて、奈津子が白蛾と会った場所だからである。

それは十一年前の昔のことである。奈津子は美聖に誘われて、あとから一人、白蛾と美聖が逢瀬の場所とした旅館を訪ねた。

小さなときめきの気持ちもあった。

東京で何度か会ったとき、奈津子は白蛾という男の素晴らしさを、美聖に聞かされていた。小さな個展が何度か、東京の画廊で開かれ、奈津子は白蛾の油彩画にも接した。当時は、雪の原野を主題としていたが、赤い描点ほどの絵にもなかった。書き殴ったような荒い筆法のモノトーンの世界だけが、示されていただけである。

赤い描点の絵の最初の作品が『赤い鴉』の絵であった。この作品は美聖の失踪後に、発表された作品である。

そのことにも、奈津子には、こだわりの気持ちがあったのだ。

網走に着いたその足で、奈津子は直ぐに網走バスに乗り、能取湖に向かった。正直なところ、この地まで、やって来たのは、やはり、『赤い鴉』と、『赤い風雪の女』の絵の主題、そのモチーフを奈津子なりに探ってみたい気持ちもあつたからである。

網走から能取湖までは、前に来たときは、JRの漁網線に乗った。いまは、廃線になり、バス運行となっている。能取までは所要時間は三十分ほどの道程であつた。やがて、入江のかたちになった能取湖畔にバスは出た。車窓から見る能取湖の水辺は、赤いサンゴ草が一面の赤い絨毯を敷き詰めたように、どこまでも続いていた。

夕刻に近い時刻のことであつた。湖の遥か向こうに見える海の空の彼方も赤く染まり、その余映が湖にも写し取られていた。

小さな旅行バッグを手に、奈津子はバスから降り、赤い草の水辺を、一人で歩いた。丁度、花の咲く季節は観光シーズンなので、人の姿もあちらこちらに見られた。

が、奈津子には人のざわめきの声は聞こえていなかった。

いつか、水辺に立ち、忘我の想いで、赤く灼けている空と、湖面のまわりの赤い敷草を視野のうちに映じていた。と、奈津子の、その赤い視野の内を、渡り鳥なのか、群れをなした一群の影が、横過（よぎ）った。

はつとして、奈津子は目をしばたいた。沈もうとする赤い太陽を見たわけではない。赤く灼けた何層もの雲が、海側の湖辺に浮いているだけで

ある。奈津子が我に帰った想いになったのは、赤い鳥の群れを見たからだ。赤い鴉？とも見えないこともない……。『赤い鴉』の絵のことが想起されていた。白蛾や美聖は、この情景を目にしたのだろうか、奈津子はしばしの想いを投げた。作品のモチーフと関連してはいると詮索した。

急に、あたりには暗さが忍んで来た。まわりには人影もなくなっていた。赤い湖から、暗い湖にと、湖面は変貌し始めていた。人を呑み込むような水面とも取れた。湖面巡りはここまでにして、奈津子はこの地を後にした。昔に來た旅館ではなく、ペンションふうの宿に、この夜は、奈津子は一泊した。なにやらに、この地に來たことで、別の感慨に耽ることになった。

前に、美聖と共にした宿で、奈津子は特異な体験をした。美聖に薦められてのことだが、奈津子に白蛾の絵のモデルになることを求められた。強引でもあったし、同行したこの意味も問われて同意したふうもあった。

あのとき…美聖は白蛾に尽くしている女を演ずるために、連れの女にも、白蛾への忠誠心を強いたのだった。「二十歳の若さ、いちばん美しいときに、絵のモデルになれるなんて、願ってもないことよ」とも説いた。

そんな勇氣はなかったが、結局のところ、奈津子は同意した。羞（はず）かしを示した奈津子を慮ってか、このとき、白蛾は白いカーテン越しの裸身でもいいと、譲歩して見せたので、このような設定の下、裸身となった。

白蛾の視線の先で、身もじぎしながら、奈津子は二十歳の美しい裸身を、そのとき晒した。デッサン画の筆を走らせながら、せつせと、白蛾は若い

女の裸身をなぞった。入魂の筆捌きで、妙な思いを抱いている方が、門違いの俗物の徒となるような雰囲気であった。

「ああ、きれいだ。実に美しい」と、白蛾は褒め言葉も重ねた。いくつかのポーズ取らせながら、透けたカーテン越しに、何枚かのデッサン画をものにした。陰毛の影を知られまいとして、妙に、股間を強く引き絞っていたのを、いま、この一泊の旅の部屋で、改めて、奈津子は今更のように憶い出していた。陰毛になど、白蛾は関心がないかのようでもあった。

夢うつつ、そんな、体全体が、宙に浮いているような、得もいわれぬ妙な体験であった。「すべてを見られている…」まだ、男を知らない穢れのな
いときのこと、小さく小さく、体が震えていたのも思い出した。

この夜は、奈津子はふすま一枚隔てた部屋で過ごした。

この夜半、白蛾と美聖は激しく抱き合った。「それぞれ、それえ、美聖は、もつもつ、死ぬよ。そんなにしたら、死ぬ死ぬ。あそこ、ああつ、子宮もよ。ぎゅんぎゅん締まって、もつ、もつ、美聖は幸せ、わし、先生に女にしてもらったからあつ」多分に、その文言は、奈津子に聴かせるための作為を含んでいた。今度こそ、本当に奈津子の体は震えた。

ごくりと生唾さえ吞んだ。何より、股間を強く強く締めていた。

その情事の間は、とても、長い時間だった。

二人の愛の時間が終わったとき、なにゆえか、奈津子の乳首は勃起していた。ひそみに手をやると、びっしりと、濡れていた。

いま思うこと、それは、あんな激しさの喘ぎ声は、その後の男性体験では、奈津子は体験しようもなかったということだった。

情事のあとも、美聖は芝居掛かった場面を用意して見せた。

「わたし、先生になら、殺されてもいい。それぐらい、先生のことが好きよ。もう、総てえ。何もかも同一体になりたいの」

「情実赴行（じょういきゆうこう）てやつだ。赴行とは真からの行動を起こすの意だ。はは、文言はただのじゃれごとだ。あんまり意味はない。お前の体が、言うなればその体の血が滾って、ふつつと血拭いている。その実体こそが、お前の存在そのものなんだ」

何もかも二人の会話を聞き取ったのではない。とつぷりと、わが世界に籠っている二人の心の一部を、垣間見ただけのことであつた。

一人の男のために、女は死ねるのだろうか。一通の遺書めいた封書には、どのような美聖の情感込められているのか。持参した封書を奈津子は開封する気になっていた。九年前に託された封書を、この旅の宿で開くことには、特別の意味があるように、奈津子には思っていたのだ。

3

和紙漉き便箋に、美聖の達筆な文字が躍っていた。十行ほどの簡潔な文章だった。旅の地に来たことで、決済を付けたい心境になり、奈津子は

美聖の封書を開ける気になったのだ。

読み終えたとき、奈津子は美聖の得意満面の顔が、目先にちらつくのを感じた。何やらに、癖のある内容だったが、美聖らしい趣でもあった。

女の愛を貫いた美聖の気持ちの昂ぶりが、行間には滲み出ていた。

『先生には迷惑が掛かるかも知れないから…』と、九年前、手紙を渡すとき、美聖が告げたその前置きのことが、わざとらしい思い入れのように奈津子には思えた。

文面には、白蛾に身も心も預けられて、わたしは幸せだというようなことが書かれており、わたしの体の美しさを賞めてくれる白蛾のために、美しいと認められている内に、この世を去りたいと言ったことが、陶醉したふうの文章で綴られていた。

自分が不幸な生まれ合わせだから、その分、神様がわたしに激情（パドス）の世界をお与え下さったのだとも記されている。

美聖が奈津子を白蛾に会わせたのも、自分の確たる生き様を、奈津子にこれ見よがしに見せつけるためではなかったのかとも、奈津子は思った。

心のどこかで、「あなたは幸せそうな星の下に生まれていいわね」と、美聖は恨めしさを示して見せたこともあった。

その自分は結婚生活を、惨めに了えた末に、今は一人彷徨っている身であった。皮肉な呟きにも思え、余計なこと奈津子の気持ちは滅入った。

やっと、奈津子は自分が一人旅に出た目的を見つけたような気がした。

美聖の足跡を追うことで、別な人生を過ごした女の生涯の一端が、垣間見えるとも思った。本当は、美聖の至幸の想いとやらを、検（あらた）めてみたい思いもどこかにあった。

美聖が白蛾と再会した地は、ここ、能取湖なのかも知れない。

初冬の能取湖には、赤い色合いの風景が用意されている。赤いアツケシ草の咲くこの季節、血の匂いがしないわけでもない。どこか、感傷的でもあったが、思い入れを深めれば、何かが見えそうな気もした。

ひとわたり、赤一色の目の前の景色を見やってから、直接に、奈津子は白蛾に会おうと思う気が兆した。その思いを強くした。

例年のことだと、堂前白蛾は青森県・津軽半島の海側にあるアトリエで、秋冬の季節は過ごしているはずだった。

バッグから、電話帳メモを取り出し、奈津子は東京・銀座にある西峰勇司郎に電話を掛けた。電話口に出た西峰に名を告げたら、西峰は驚きを示した。九年前に、美聖が失踪しときに、会ったきりだったが、彼女の名前はちゃんと憶えていた。

奈津子の声は、どこか、寂しさを含んでいた。一人旅で、この地を訪れたと告げたとき、「どうして一人旅を？それに、堂前画伯に会いたいというのは、何か理由があつてのことですか？」と、西峰は問い質した。

「いま、わたし、とても気が滅入っているのです。離婚したりと、色々あ

って…。先生と初めて会ったとき、わたし、何か感ずるところがあったと言うか、それに、美聖さんの失踪のことも何となく気なっていて。能取湖には美聖さんも行くようなことも言っていたので、わたしも真似をして、この地を訪ねることにしたのです」

「うーむ。プライバシーのことだから、口を挟む気はありませんがね。画伯は激情家、もしかして、危険な方かも知れませんよ」

西峰は男と女のこと暗に匂わせた。

いつか、美聖も同じような台詞を口にしたのかも知れない。

受話器を耳にしながら、ふと、奈津子が考えたことである。

「そういう寂しさもわたしの気持ちの中にはあるのです。一人の男に激しく愛されたい。そんな気持ちは女なら誰でもあるんじゃないですか？」

「あなたも激情家の一人ですか？これ以上のことは申し上げません。何とか、先生の行く先を確かめて見ましょう。わたしどもの、知っている限りでは、竜飛岬近くのアトリエに籠もられているということだけです。この初冬の季節ならね。先生と会う決心が変わらないようなら、もう一度、ご連絡を下さい。それまでに、先生の居場所を突き止めておきます」

西峰との電話は、このときはこれで切れた。

一晚、奈津子は能取の旅館に泊まってから、一旦は、東京に戻ることにした。どこか、一人旅も侘しいもので、自分の半生への切ない思いもあつて、この夜は、よくは眠られなかった。

美聖が残した手紙を、もう一度取り出して、つくづくと眺めた。

文面の文字は美化された文句ばかりだったが、それでも、美聖の決意のほどがよく表れていて、胸を打つものもあった。

美聖は白蛾の求めで死んだ——どのような方法で？

奈津子は『赤い風雪の女』の絵の中で確固たる存在感を放っている。それは、疑いのない事柄であると、改めて想った。

暴雪の吹き荒れる白い樹林は、地を這うように風勢に撓（たわ）んでおり、半裸身の、目鼻立ちのない顔の女は、その白い風雪の森に、いままさに、消え去ろうとしていた。美聖は自ら、死を望んだのか？

それとも、白蛾の手に掛かり、殺されたのか？

いずれにしろ、美聖は白蛾に身を預けてから死んだことにはなる。

自らも奈津子は白蛾に自分も接近する気持ちを強めていたが、美聖の死に方を問い詰めるつもりはなかった。

少し、恐い想いもするかも知れないが、奈津子は白蛾が、美聖に殺意を持ったモチーフそのものは、赤い鴉自身なのか、どうかを確かめてみたいと、いまは、ひとまずは思っているだけのことであった。

釧路までJR線が出た。一時間四十五分ほどの距離で、あとは、空路に頼った。羽田に到着して、飛行機のタラップを降りたら、眩しいばかりの太陽光に遇ったゆえか、一気に、心のもやもやは晴れていた。

十一月の声を聞いた頃、奈津子のところに、西峰から。連絡の電話が入った。くぐもった声で、居場所だけを短く知らされた。

白蛾の居場所が知れたのでと言い、例年通り、堂前白蛾は竜飛崎近くの小さな漁村、小泊地区のアトリエにいと告げられた。

なぜなのか、一つ、条件を付けられた。九年前に失踪した美聖も、出発前には、一通の書面を西峰に預けたという。もっともらしく、西峰はその間の事情を口にした。アトリエは隔絶の地、急病になることもあるし、思わぬ怪我なども、死に繋がることも有り得るとも告げた。

「遺書とまでは言わないが、つまらぬ不祥事で、先生に迷惑が掛かるようなことがあっても困るしね。まあ、念書のようなものだよ」

と、言わずもがなの、案件までも付け加えた。

どこかで、西峰は奈津子の心意を読み取っているかの節もあった。

美聖と血の繋がりある女、そして、急に、白蛾と会いたいと願いだした唐突さ、女の不幸そうな境遇、男の激しい愛とやらを、恋い求めているかの素振り、奈津子が美聖の代役を引き受けた気であるのも看取った。

「先生は激情家だから危険な方かも知れませんが」その、西峰の文句も、奈津子は想い出していた。「殺意をちらつかせた『赤い鴉』は、西峰自身でもあるのか？」とも、奈津子は考えたりもした。

白い画布を広げ、赤い血の一点を滴らせる、そのモチーフの在り処を、奈津子は心得たふうの解釈で思い描いてもいた。

獲物を狙う白蛾の鋭い眼（まなこ）に魅せられもしていた。

奈津子も遺書のつもりで、念書の一文を認（したた）めた。自らで死の匂いを込めた。「堂前白蛾画伯のために、わたしは何ものをも厭わず、全身全霊尽くします」と言った過激な文言も用意した。

西峰は、細かい指示をした。竜飛崎に向かう途中に、青森で念書は、速達で、東京・神田局の私書箱宛てに送ること、その手紙を確認したあとで、いま現在の白蛾のアトリエのある場所と、連絡先の電話番号を教えるので、改めて、当方に連絡すること、その二日後に、直接、奈津子自身が白蛾に電話連絡をし、訪問日時を決めることと、そのように奈津子に伝えた。

奈津子が東京を発ったのは、十一月も末のことであった。冬の到来は早く、北海道の日高山系では、もう、豪雪の便りがあつた。

青森まで、航空便で出て、あとは、JRの津軽線に乗り継いで、奈津子は竜飛崎に向かった。南沿いに、列車は走った。津軽海峡の海景色は灰色に閉ざされ、里地も、すでに、白い雪野に変えられていた。

津軽線は、三厩（みうまや）が終点である。そこから、竜飛崎まではバス便であった。岩洞を穿ったいくつかのトンネルを抜けて、やっと、竜飛崎に着いた。本州・最北端の地にやって来た感慨が、改めて、奈津子には

湧いた。海からの強い風雪が、小さな帯島の湾口にと吹き付けて来て舞った。雪だけではなく、雨粒のような海水までもが、風雪には混じっていた。岩崖にも守られていたが、暗い空と、海の荒れようが、湾の狭い吹き抜けの道から窺え、一步、死界に踏み込んだような恐れをも抱かせた。ぶるつと身を震わせ、奈津子は身を屈めた。

旅館は灯台の山側の地にある。一階が食堂で、二階が客室の造作であった。灯台のある台地の向こう側の山地は穏やかに見えたが、「灯台の海側は、一気に、百メートルほども下る急峻の断崖絶壁だ」と、宿のおかみさんが、心得ふうに、教えてくれた。

この夜、やっと、旅館から西峰の自宅に、奈津子は連絡の電話を入れた。奈津子は白蛾のアトリエを構えた場所を知った。竜飛崎から、さらに、日本海沿岸を巡った小泊と十三港の中間あたりの海岸地帯だった。

翌朝、海鳴りの轟きの音で、奈津子は目を覚ました。車を呼び、国道を辿って、奈津子は海岸線に突出する夫婦岩を目標に白蛾のアトリエに向かった。国道とは言え、波が岸まで寄せて来るので、平坦な道ではない。

風雪が厳しいときは、当然のことながら、通行不能となる難所だった。「小学校の児童だって通学不能となることが間々あるんですよ」と言う、運転手の話を小耳に挟んだが、そんな話は耳にも入らず、奈津子は聞き流した。もはや、心ここに非ず、気持ちが高揚していた。

目標の夫婦岩のあたりで、奈津子は車を降りた。

地元では、変わった画家で知られる堂前白蛾のアトリエの近くまで、運転手は案内してくれた。「何人かは、案内させてもらいましたよ」とも、余計なお喋りもした。ひとまずは奈津子も礼だけは言った。

一面の雪野原に、何軒かの漁師小屋や、舟小屋があった。みんな雪を被っている。防雪林に囲まれた地の、離れた場所に、白蛾のアトリエである一軒家があった。持参した長靴に履き替えてから、雪道を歩いた。

漁具小屋兼番小屋だった頑丈な造りの木造小屋にたどり着いた。

薄暗い土間に立った男の目線は鋭かった。

顔は痩せ、長い蓬髪には、半分ほど白髪が混じっていた。

昔日の面影はない。精悍に見えた体全体が、一回り小さく成っていた。

「きみが、あのときの女か」

多くは語らなかったが、十一年の歳月の経過を、白蛾も看取ったようだった。三十一歳になった女、色香は残っていたが、二十歳だった頃に比べれば、魅力の失せた女になっていたに違いない。少し、邪険に白蛾は振る舞っているふうに奈津子には思えた。髪の毛に付いた雪を払う奈津子を横目で見やりながら、ひょいと、白蛾は上がり框（かまち）に足を掛けた。

この日から、二人の奇妙な同居生活が始まった。アトリエは板の間の一つが充てられていたが、画布を前にしながらも、一向に白蛾は絵を描く気構えは見せなかった。それに、終日、喋ることもないので、奈津子は無聊さを強いられた。取付くしまのない日々であった。

奈津子に当てがわれた部屋は、中二階の様式の蚕棚のような物置き場だった。古いダルマ式のストーブが持ち込まれていたので、寒さに震えることはなかったが、一緒に住んでみると、奈津子の心は冷えた。白蛾が口を訊かなかったこともあるが、白蛾は男と女とにある情のようなものも、一切見せなかった。要するに、奈津子は無視されていた。

美聖と白蛾との、かつての激しい情事の様を、目の当たりに見せつけられたこともあるから、多少の期待感のような思いも、奈津子には無いではなかった。危険な男と言うものの謂いには、激情男の意も含まれているはずだった。激情に身を委ねたいと、思っていた節も少なからずはあったのだ。美聖のことの始末を尋ねる前に、打ち解けた男女の仲になっておくことも、必要なかとも思っていた。隙のない男では取付きようがない。

画筆は揮わないまでも、白蛾は自分の芸術心を、研ぎ澄ましているのか、荒れ狂う北の海の怒濤の叫びに、じっと。耳済ましていることがよくあった。一人、超然としている。ともかく、近寄り難かった。

海が荒れていない日は、一人、浜辺に立った。それとて、自然の気風に立ち向かっているような、凝然とした面持ちままに對していた。

人間らしい表情に戻るのは、一日二度の食事時だったが、それとて、無口のままで、口元は緩まない。土間の隅に、三升なべと言われる深鍋があり、大根や、人参などの野菜類や、たらなどの魚類の具が、ごつちやに煮込まれた味噌仕立てのじゃっぱ汁が、二人の常食であった。

そんな日々、奈津子はもの憂い想いで終日を過ごした。

何の変哲もなく、こんな最果ての地にやって来た甲斐もなかった。

外界と隔絶された世界だから、訪うて来る人もなく、防雪が吹き募った夜は、二人のいる板小屋は完全に無援孤立した。

しゅるしゅると、地吹雪が、旋風（つむじ）の風を起こした。みしみしと、木組みの柱が軋りの音を発した。吹き千切れた波が飛んで来て、木小屋全体が悲鳴を上げ続けた。ぱちぱちと、飛沫音も爆（は）ぜた。

この豪雪の地に来て、二十日ほどが経過した頃、やっと、白蛾が口を利くようになった。きつかけとなったのは、白蛾が美聖の遺した手紙を読みたいものだと、言ったからであつた。

だが、奈津子は、その申し入れを拒否した。なぜか、素直な気持ちになれなかった。多分に、わたしはわたしだと言ってみたい思いもあつた。

「きみにもあの女と同じ血が流れている。淫蕩の血か。それとも、もっと淫靡なものか。同じじゃ詰まらないが、美聖以上の勝手なもの想いとやらが、お前を通して発見出来れば、少しはわたしの作風に与（くみ）するところもあるかなと思ってね」

「このわたしに？何をするのですか？」

「さあ？予め分かっていることなど、なんの衝撃もないではないか。絵描きは口なんかでは表現しない。衝動が欲しいだけだ」

「美聖さんにまだ関心がおありのようですから、この際、わたしの知りた

かったことを、問い質させて下さい。美聖さんは失踪したまになっていますが、美聖さんの身の上には何があったのですか？」

「詮索話か。追って、分かるようにはしてやろうか。うんざりだな」

「：『赤い風雪の女』は素晴らしい作品ですね。わたしの一番好きな作品です。一つだけ教えてください。あの作品の主人公は美聖さんですか？」

「どうでもいい。作品は手を離れば、なんの意味もない。もちろん、詮索話など、これはもつてのほかだ」

「分かりました。わたしの肉体には、先生は、関心はお有りなんですか？」

「そう言うことを口にするか。この俗ぶつめが。いまさらに何をする？再開して、お前を一目見たときから、もはや、美しい肉体の持ち主ではないと思った。どうせ、どこかの男に淫ら喰いをされた身でもあるのだろう。」

「いいか、きみの二十歳のときの美しい肉体を、わたしはデッサンした。あのときの感激だけで充分だ。一つ、お前の歓びそうな話を付け加えておこ

うか。美聖なんかより、お前の肉体の方が、美的価値は遥かに優れていた。

実は、あのとき、わたしは美聖なんかじゃなく、お前に恋をした。そう、

あのときの想いのままにだ。お前を穢したくない。そんな純な想いを抱いた。それで、お前には手を出さなかった。それが…」

「それが何ですか？それでも、美聖さんは先生の作品の中で生きているのは事実です。違いますか？」

「まだ言うか。それじゃ、一気に答えを出してやろう。わたしに就いて来

い。きみは死ぬしかないのだ。長々と生き永らえて、その末に、こんなところまで、のこのことやって来やがった。わたしの純な想いも打ち砕かれた。美しくもない女、殺すには十分の理由だろうが、おい、そうだろう」

「…お願いします。わたしは死ぬ気で、この地に来たのですから。『赤い風雪の女』のような設定ですね。わたしにはどんな素敵な題が付されるのですか胸の内が、わくわくして来ました」

「そうか。来い。外は大嵐だが、穢れたお前の肉体を洗い浄めてくれるやも知れぬぞ。いやその穢れた心の内をもだ」

小木屋の外に二人は出た。新雪の処女地を歩き、奈津子が先だって歩いた。奈津子の髪が毛羽立ち、その顔を覆った。一寸先も見えない。

ちよいと、白蛾が奈津子の背を突いた。少し、よろけたとき、白蛾が手にしたナイフが奈津子の心臓に刺さった。どばっと、血が一気に奔（ほとぼり）り出た。美聖の口から、血の花が噴き出た。

「おおっ、『赤い吹雪の女』か。口から血噴いたぞ。勢いよくだ」

女への餞（はなむけ）けのつもりか、白蛾は画題らしきものを口にした。仁科奈津子の耳には、僅かにだが、言葉の断片は届いていた。

やがてのこと、血を吸った雪の塊は、押し寄せた荒波に持ち去られた。どどつと、何度も波濤が覆いかぶさり、そして、一緒に死体をも、海の彼方へと捨てた。冬の間に、その死体を小魚どもが啄み骨だけにする。何事もなかったかのように。雪は更々に降り積もり、白い雪野はいつも

の荒々しい風景にと戻っていった。

了